

海外調査報告

「オーストラリア・ニュージーランドのウォーターフロント」

前研究第一部主任研究員 片沼弘明

はじめに

平成8年9月（南半球は春に当たる）にオセアニアの主要都市（ブリスベン、シドニー、オークランド、クライストチャーチ）を訪れた時の都市河川における河川景観や河川利用状況、また都市地域において少なくなった大規模な空間としての河川空間や沿川地域の有効利用などについて報告します。

様々な河川空間利用がなされているブリスベン

オーストラリア大陸の4分の1を占めるクイーンズランド州(QLD)の州都であるブリスベンは、シドニー、メルボルンに次ぐオーストラリア第3の都市であり、19世紀初めに、この街の建設が始まり、現在では人口135万人の大都市である。気候は常夏の亜熱帯性で、ブリスベンを拠点として、北はケアンズ近郊のグレート・バリア・リーフ、南はゴールドコーストと明るく、爽やかなムード漂うリゾート地が海岸線に連なり、マリンスポーツのメッカともなっている。

ブリスベン川はブリスベンの市街地(シティー区)を取り囲むようにして流下しており、「市民はどのように利用しているのだろうか」という視点で川沿いの約4kmを散策してみた。

まず目に映ったのが、川沿いのプロムナードと隣接するアミューズメント・パーク。ここは、サウス・バンク・パークランズと呼ばれる、1988年に「テクノロジー時代のレジャー」をテーマとして開催されたワールド・エキスポ跡地を利用して、ブリスベン市民のために「開かれた緑の空間」の創造を目指し、公園主体で整備されたところで、週末には家族連れで賑わいを見せているところもある。16haの広大な敷地には、コアアラ、野鳥、コウモリ、トカゲなどに会えるゴンドワナ・レインフォレスト・サンクチャリや珍しい蝶や昆虫の楽園のバタフライ&インセクトハウス、公園内を30分かけて遊覧するサウスシップ・フェリーといった施設のほかに、人工ビーチや遊歩道、せせらぎ水路などがある。隣接するブリスベン川は、川幅が広く、水深もあり、流れも適度に速いことから、親水性は期待できず、代替として川沿いに親水性の高い施設を建設したもので、訪れたときは平日にもかかわらず、親子連れやカップルなど大勢の人が泳泳や日光浴、ジョギングなどを楽しんでおり、十分に市民のニーズに応えた施設となっていた。(写真)



写真



写真

次に目に映ったのが、20haもある植物園で川と接する部分には、マングローブ林が保全されており、ここで共生している水生動物がしっかりと保護されていた。これは、河岸のほとんどが開発され、自然を失ってしまった都市河川の数少ない自然を次世代へ残さなければならないという意思の現れと感じとれた。(写真)

その他にも、ウォーターフロント開発した地区があったり、プレジャーボートの係留施設があったりと、市内交通・観光手段としての船着場があったりと、様々な手法で河川が活用されており、それを市民が十分に利用している姿を見るにつけ、今までの川づくりに欠けていた一面を垣間見た思いがした。

次期夏期五輪開催の街シドニー

シドニーの歴史は1770年に、キャプテン・ジェームス・



写真

クックがボタニー湾に上陸し、その18年後の1788年にアーサー・フィリップ総督率いる船団がジャクソン港に到着して英国領を宣言したことから始まっており、シドニーの地名や街並みは英国そのもの。オーストラリアの経済・文化の中心であるシドニーは、ニュー・サウス・ウェールズ州の州都で、歴史の起点である深く入り組んだ入り江と周辺の緑に抱かれたジャクソン港は、人々の生活に潤いを与え、開拓以来変わらぬ美しさを保ち続けている街です。

シドニー市街地はシドニー湾を中心に開けた街であるが、シドニー湾はとても入り組んでおり、一見したところ海というよりも川の河口部を思わせる感じがする。湾の北部と南部の市街地をつなぐ橋梁が1橋しかないため、市民はフェリーを今でも通勤や通学またはショッピングの主な交通手段として利用している。このため、各フェリー乗り場周辺ではウォーターフロントの開発が盛んに行われており、世界の中でも早くから開発がなされた場所でもある。

フェリー発着の中心であるロックス地区は、シドニー発祥の地として開拓時代の建造物の保護や復興を中心に、オペラハウスやハーバーブリッジなどの観光、ド・メインやハイパークなどの公園、等々それぞれに見合う形でウォーターフロント開発がなされており、また、ダーリングハーバー地区では、博物館、水族館、イベント広場、ショッピングセンターなどの施設が、ハーバー全域を余すところなく連なっており、何れの地区においても施設が水面に顔を向け、水と都市、水と緑が違和感なく交わっている景色にとっても好感を覚えた。国内の都市河川における街と一体となった川づくりの完成形が、これに近い形でなされるならば、地域住民の河川への関心度が増し、河川利用が促進



写真



写真

され、大規模空間としての河川が意義あるものになると思われる。(写真)

帆の街オークランド

ニュージーランド北島の中央に位置する港町、オークランドは約90万の人口を擁するニュージーランド最大の都市であり、オークランドは別名「シティー・オブ・セイルズ(帆の街)」とも呼ばれており、この名の通り、緩やかな緑の丘陵と青い海と白いビル街のコントラストが鮮やかな街で、ワイテマタ港、マヌカウ港と2つの良港に恵まれ、貿易と商工業の中心地として繁栄してきた街です。

ここから南へ200kmほどのところに北島第一の観光地、ロトルアがあり、美しく静かな森と激しく噴き揚げる間欠泉の見事なまでのコントラストが、国内外を問わず様々な

観光客を魅了しており、日々数万人の観光客が訪れる観光都市です。

この湖（ロトアル湖）に流入するワイオホワイロ川はニジマスを養殖している河川として有名なところで、この川の源にある湧水が水量・水温などをある程度一定に保っており、さらに中流部には適度な産卵場があることから養殖の適地となっている。ここでは、ニジマスの生息場にある区域をいくつかに分け、それぞれの成長段階毎に（稚魚、1年魚、2年魚などといった具合に）グルーピングし、湖へ降下させることなく、限られた範囲で養殖を行っている。生息場には産卵床や移動のための魚道などがあり、また、観光用に観察窓も設置されている。（写真 ）

ニジマスの持つ本質からすると湖までの自由な往來をさせるべきだと思う一方で、外来魚であるニジマスだからこそ限られた区域で生息させるというのも一理あるような複雑な思いがした。というのも、魚がのぼりやすい川づくり事業における本来の生態系に復元するという一面は、一方



写真



写真

で、今落ち着きつつある生態系を本来の生態系ではなく、新たな生態系に変えてしまうという可能性も秘めており、魚からすると余計なお世話なのかもしれないという気がしたからである。

オークランド市街地の東西にはウォーターフロントと呼ばれている海岸線が開けており、市街地は海の玄関口として、船着場やショッピング街、ホテルが建ち並び、両サイドには人工の海岸線が連なり、海浜公園や海水浴場として利用され、また、ヨットが無数に停泊しており、市民の手頃なリゾート地としての開発がなされている。（写真 ）

シドニー同様、如何に市民の目を水へ向けさせるかがポイントになると思われるが、そのためには、海（川）のもつメリットを大いに引き出し、市民ニーズとの調整を図りつつ、魅力ある水辺を創造してこそ、はじめて市民にも認められるであろう。



写真

庭園都市クライストチャーチ

ニュージーランド南島のほぼ中央に位置するクライストチャーチは「庭園都市」であり、市に中心には重厚なゴシック建築の教会がそびえ立ち、それを緑豊かな公園や庭付きの住宅が取り囲んでいる。また、この街は「英国以外で最も英国的な都市」と言われ、街を歩けば、この地に英国の都市を再現しようとした初期開拓者たちの夢が今でも感じられる街です。

クライストチャーチ市街地を貫流するエイヴォン川とヒースコート川の二河川は、河川改修により蛇行部を直線化することもなく、本来の河道法線なりに改修がなされてお

り、両河川とも自然河道が存在せず、環境整備の河道が延々と続いている。植物分布としては河畔に枝垂れ柳やポプラ、サクラなどの中高木、河岸に向かいスイセンやタンポポなどの花や芝生、水辺には水生植物が植えられている。これらのバランスが川と街との間の緑地帯として見事に調和されており、また、幅や密度が適当で芝の手入れなどを地先の方々が毎日行っているため、水際へのアクセスや街から川への眺めを遮るものがなく、面的な広がりを感じずにはいられない。(写真)

河道は、平常時の水量と断面が適度に合っており、また、水深が50cm程度であるため親水面においても、魚類(トラウト、ウナギなど)や水鳥(カモ、カモメなど)などの生物において適当なものになっている。河岸には護岸を施している箇所も見受けられたが、石を空積みしていたり、小型ブロックを用いているため、空隙から草木が茂って、その殆どを覆い隠している状況にある。



写真



写真



写真

河川の利用面ではカヌーやボートでの川下りが行われていたが、釣りはライセンスを取得していても禁止となっており、天然遡上のトラウトやウナギに対する資源の保護は徹底していた。(写真)

まとめ

我が国における河川は、今までの治水面が重要視され、近年やっと、多自然型(あらゆる生き物にやさしい)川づくりや景観に配慮したもの、親水性・イベントなどの利用面に配慮したもの、都市の中の河川として街づくりと一体的な整備を行うものなど、様々な視点から河川が検討されるようになってきた。しかし、一朝一夕には方向転換できず、先進諸外国の事例を研究したり、国内で試行錯誤を繰り返したりして、新たな川づくりを推進していかなければならない現状にある。

今回の調査では、市街地を貫流する河川と湾内に市街地が発展した都市の2パターンを水と緑と都市がどのような関係を保ち、市民がどのように活用しているかを調査のポイントとしてきた。どの都市においても想像以上に河川(港湾)が多目的利用の空間としての役割を十分に担っており、また、各々が先進事例のコピーではなく、それぞれの文化や風土を反映したオリジナルな川づくりが行われているため、人と川が同化している印象を強く受けた。

我が国においても早々に、川に背を向けた状態から川に顔を向けた状態に遷移していくことが急務であり、限られたスペースしかない我が国では、河川空間の持つ多様性が今後もっと、もっと注目されていくものとおもわれる。